

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

心からの言葉は必ず 生徒に響くことを学んだ

福島県立福島高校 浜田伸一

生徒は教師の言葉に敏感だ。教師がどれだけ本気で語っているか、たちどころに見抜いてしまう。では、生徒の心に響く言葉はいかにして生まれるのか。先輩との出会いを通して言葉の力を知った浜田先生が、今も続く探求の日々を語る。

進学校での進路指導の重責



いつかは母校で教えたいという念願が叶って安積高校に赴任

したのは、41歳の時でした。既にベテランと呼ばれる年齢でしたが、県下屈指の進学校の同校で、自分の教科指導や進路指導が通用するだろうかと不安も抱いていました。

初年度から1年生を担当しましたが、やはり生徒は教師の力量を的確に見抜くハイレベルな集団でした。課外時に「○○先生が担当ではないのですか」と、指導に定評のある先生の名前を出され、悔しい思いもしました。持ち上がりで3年生の担任を

務めました。進路指導にはさ

らに重責を感じました。先輩方に教えていただきながら指導しましたが、なかなか生徒の本音を引き出せずに悩みました。今考えると、「失敗したくない」という思いから守りに入り、私

自身が生徒に本気でぶつかって

いなかったのだと思います。そんな私の守りの姿勢を根本から揺さぶってくださったのが、当時、進路指導部長だった

浅野嘉尚先生です。浅野先生の言葉にはとにかく重みがあり、不思議なほどに生徒の心を動か

しました。集会での一言が生徒の手で廊下の黒板に書かれ、学校新聞の「流行語」に選ばれたこともありました。卒業文集に生徒が書いた「志を何に向けた

らよいか分からない者、志が高

すぎて持て余している者は、一度、その思いを浅野先生と語るべし」という一文からも、どれほど生徒の信頼を集めていたかが分かります。

言葉巧みに生徒の心を引きつけるかと思えば、ある集会では押し黙り、最後に「安積高校には夏休みはありません。勉強してください。以上」とだけ発し

て生徒の喝采を浴びるなど、その場の空気を支配する緩急ある

指導はまさに圧倒的でした。「浅野語録」は今もたくさん心に

残っています。「汝、何のためにここに在りや」「火種が強ければ火は燃え上がる」といった言葉には、私自身も感動し、「もっと頑張らなくては」と指

導への思いを熱くしました。

不安だからこそ人は進歩する

浅野先生の巧みな言葉は生来のセンスなのだ、最初は思っていました。ところが、それは少し違いました。

ある集会の後、浅野先生が「今日は準備が不十分だった」と残念そうに漏らしていました。どういうことかと聞くと、浅野先

生は集会前に、その時期の生徒の心情を推し量った上で話す内

容を練り、さらに持ち時間を考えながら、通勤の車内で実際に

声に出して何度も練習しているのだと教えてくださいました。それまで紋切り型の言葉を弄するだけで生徒に本気でぶつかっていなかった私は、自分の

先輩教師の言葉

生徒に話をする
機会を持たたことに
深く感謝をする

福島県立安積高校元教諭
浅野嘉尚



私は生徒に
インパクトの
ある言葉を投
げ掛けようと

しましたが、浜田先生はじわじわと生徒の内面に迫る指導をされていきました。まるで、しとしとと降る「春雨」のように、生徒の心に染み込んで育てる、そんなイメージで、当初から「懐の深い先生だな」と思っていました。私とはタイプは違いましたが、浜田先生が私の言葉から学んだと言ってくださいるのはとてもうれいのですし、今更ながら言葉の力とそれに対する責任の大きさを感じます。

生徒への言葉を考える際、私には「こんなに優秀な生徒の前で話すチャンスがあるなんてありがたい」という感謝の思いが常にありました。安

左 あさの・よしなお 数学科。福島県立南会津高校、小野高校、川俣高校、福島高校、安積高校、私立・福島成蹊高校を経て、現在、桜の聖母学院高校講師。

右 はまだ・しんいち 国語科。東京都足立区立第四中学校、福島県立磐城農業高校、石川高校、安積高校を経て、福島高校へ。進路指導副部長。

撮影○福島高校にて



甘さを深く反省しました。そして、それ以降、自分の経験を踏まえた言葉を選び抜いて語り掛けるように心掛けました。それは難しいことでしたが、次第に生徒との距離が近づいていくのを感じました。

その後、浅野先生は定年退職されました。「私を『頼れる人』と思ってくれたのなら、皆さんがそれに続く人になってほし

い」という退任の挨拶を聞いて、自身の成長を心に誓いました。

2回目の3年生を卒業させた後、私は進路指導部長の大役を打診されました。浅野先生のよ

うな指導が出来るとは思えず、断るつもりでしたが、結論を出す前に浅野先生に相談しようと思

がある」「極言すれば、教師が夢を語れば、それが進路指導だ」と、私を励ましてくださいまし

た。さらに後日、励ましの手紙までいただき、考えを改めて重責に挑むことにしました。

その後、安積高校と並ぶ進学校である福島高校に異動し、進路指導部に配属されましたが、今も生徒を鼓舞する言葉を生み出すことの難しさを実感する毎

日を送っています。それでも、浅野先生から思いを引き継いでいることは私の誇りです。

福島では震災で生徒が心に深い傷を負いました。私は、苦難に向き合うこの福島から、次代を築くリーダーを送り出したいと思っ

積高校の生徒は打てば響く本当によい生徒ばかりでした。だからこそ、少しでも心に残る言葉を掛けたいと思い、妥協せずに考えられました。しかし、どれだけ準備をしたつもりでも、「これが抜けていた」と、後でいつも反省したものです。その思いがまた、次の話を考える原動力になりました。当時は、「もし自分が高校生だったら、どういう言葉に勇気付けられるか」と、自分に置き換えて考えていたように思います。

私は、生徒に誇りを持たせる言葉を大切にしていました。ある集会で、「安積高校は丘の上に立つ高校である」と、誰もが羨む高校で学んでいるのだから誇りを持ってほしいと比喩的に話したところ、生徒がシーンとなって聞き入ってくれたことがあります。誇りを持つことで生徒は大きく育つものです。

今の先生方には、明日の日本を考えた教育をしていただきたいと思っています。これからの平和な日本をつくる人材を育てることが先生方の使命です。教師という仕事に誇りを持ち、不幸な震災を乗り越えて大きく育とうとする生徒を力強く支えてください。